青山国際政経論集 63 号，2004 年 5 月

研究ノート

日本のカトリック出版物にみる スペイン内戦報道（1936–1939 年）

渡　邊　千　秋

はじめに

1937 年 12 月，スペイン内戦の決着を見ぬまま，日本政府はスペイン国フランコ政権を承認し，また枢軸国間の防共協定に同政権を参加させるべく外交を展開した。[1] この点に着目し，スペイン内戦を日本の外交政策と関連づけて考察した研究としては，当時の日本政府の対応を日本の外交文書に依拠して分析した塩崎氏の研究や，[2] 日本・スペイン双方の外交文書を利用した深澤氏による研究を挙げることができる。[3] またロダオ氏はスペイン・日本・アメリカ合衆国の外交資料に加えて関係者の聞きとり調査も行い，第二次大戦下の日西関係を論じるにあたり，内戦期の日西関係にも言及している。[4]

実際のところ，1930 年代の日本に住む人々の大半にとって，スペインは地理的に「遠い国」であったはずである。[5] しかし，予想に反して，川成氏の研究に明らかなように，1936 年 7 月以降に日本で提供された膨大な量の内戦関連記

1）塩崎弘明「フランコ政権の日独伊防共協定参加について」斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社，1979 年，pp. 258–274.
2）同上。
3）深澤安博「スペイン内戦と日中戦争」『歴史評論』447 号，1987 年，pp. 42–51.
4）Rodao, Florentino, *Franco y el imperio japonés*, Barcelona, Plaza & Janés, 2002.
5）これはヨーロッパ的信仰を持つことを自負するカトリック信徒にあっても同様で，スペインといえば「16 世紀に渡来したキリスト教宣教師たちの母国」「イエズス会士ザビエルの故郷」というイメージを再生産することに終始していた。『カトリック・タイムス』204 号，昭和 4 年 2 月 1 日，p. 1; 同 209 号，昭和 4 年 4 月 21 日，p. 2;『長崎カトリック教報』112 号，昭和 8 年 6 月 15 日，p. 3 等を参照されたい。

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Business, 2004

事の存在は，それを読み受容した読者の存在を明確に暗示するものである。[6)]

小稿は，日本におけるスペイン内戦報道に言及する上で，これまで着目されてこなかったカトリック出版物に焦点をおきたい。そこで表象されたスペイン内戦像を再考すると共に，ひいては，当時の日本社会におけるカトリック教会の立場を考察したい。また小稿は当時のカトリック出版物を網羅するものではないことをここで確認しておく。[7)]

1. スペイン内戦に関する日本カトリック出版物の報道姿勢

全日本各教区の共有紙[8)]としての『日本カトリック新聞』をはじめとして，カトリック出版物では頻繁にスペイン内戦がニュースとして，また論説のテーマとして取り上げられた。[9)] 特に前述した新聞は情報紙であると同時にカトリック教会の機関紙としての布教宣伝効果を狙う側面も強かったので，掲載される記事では内戦の宗教的側面が強調されるのは当然の成り行きであった。内戦関連記事の情報源としてはロイター通信・フィデス通信・ユニバース紙等の外電と，[10)] またカトリック教会の持つ全世界的人脈とを挙げることができる。つまり直接にスクープ情報を獲得できない分は，日本在住のスペイン人神父や修道女が現地の家族・知人を通して知ったニュースを使って補っていたのである。時にはあまりにも個人的な見解が，まるでスペイン国民全てが経験し承認しているニュースであるかのように編集されており，ここには情報・意見の偏向が存在する。

---

6) 日本の日刊新聞のスペイン内戦関連記事については，川成洋編『資料 30 年代日本の新聞報道—スペイン戦争の受容と反応』彩流社，1982 年を参照。

7) 各出版物の発行部数，読者層，イデオロギーなどを詳細に検証することを含め，資料を補強した上での通時的分析は，今後の課題となるであろう。

8) この定義は同新聞による。『日本カトリック新聞』は毎週日曜に発行される週刊紙であった。また 1937 年 7 月になって日本カトリック新聞社が創立された。参照：カトリック新聞社編『聖霊は限りなく』サンパウロ，2000 年，pp. 60–61.

9) しかし当然ながら『朝日新聞』等の日刊紙と比較すれば量的には劣る。

10) 例えば『朝日新聞』とは異なり，『日本カトリック新聞』やその他のカトリック雑誌は現地に特派員を送ることはなかった。また，朝日新聞特派員であった坂井米夫の活動に関しては，川成洋編『動乱のスペイン報告—ヴァガボンド通信 1937』彩流社，1980 年を参照されたい。

日本のカトリック出版物に掲載された内戦関連記事の大多数は，スペイン・カトリック教会が置かれた状況を教会内多数派の心情に従って説明するものであった。1937 年 7 月のスペイン司教団集団司牧書簡によって，内戦は聖戦であると世界中のカトリック信徒に向けて喧伝される以前から，日本のカトリック出版物は現地の教会関係者や建造物にもたらされた被害について詳細に伝えていた。スペインでは高位聖職者の多くが共産主義者の暴力から宗教を守るという大義のためにフランコ将軍率いる反乱軍を支持し，また信徒も多数反乱軍側に立っていた。このような状況下にあって，日本の信徒に伝達されるのは，ローマ・カトリック教というスペイン的伝統を撹乱する者としての共和国軍側の暴力的行動と，反乱軍によるカトリック教保護・救済活動の成果であった。[11] というのも日本のカトリック出版物が，内戦を正戦として報道する道を選択したからである。そしてカトリック的スペインを救うための「聖戦」を戦う反乱軍側寄りの視点から，フランコ陣営と共和国陣営の宗教性と反宗教性とを対照的に描くことは，戦火の中で自らの生命を賭けるカトリックの闘士たちを讃える結果を生んだ。また同時に，反乱軍を率いるフランコ自身の宗教心も強調されることとなった。[12]

しかしながら日本のカトリック出版物はしっかりした戦況判断を行えていたわけではない。[13] また，内戦勃発当初から一貫して反乱軍を支持していたわけでもない。例えば『日本カトリック新聞』は，1936 年 9 月の段階では，この戦いをあくまでも「具体的に論じるものでもなく論じることもできない」ものと理解していた。また雑誌『カトリック』は 1936 年 9 号の巻頭言で，共和国軍による聖職者殺害・教会建築物破壊等を取り上げる上で，『クリスチャン・センチュリー』誌が内戦に「聖戦」の評価を与えているということを引用した上で

11） 集団司牧書簡の原文は以下を参照されたい。Iribarren, Jesús (ed.), *Documentos colectivos del Episcopado español*, Madrid, BAC, 1974, pp. 219–242.

12） その一例として，『カトリック画報』昭和 13 年 4 号，ページ数記載なし，「赤色スペインに代わるもの」を見よ。またここでは世界のカトリック信徒がフランコ政権に同情を寄せているとしている。

13） 内戦の早期解決を予言した雑誌もあった。岡延右衛門「時事解説」『声』727 号，1936 年，p. 44.

もなお，「我等は事実の真相を察知しないから，事実問題を批判の俎上に上げることを一切さけたいのである」[14] と述べるに至っている。しかしカトリック出版物は，日本のカトリック信徒の注意を喚起しようとして宗教を迫害する共和国軍の暴力と反乱軍側の宗教擁護活動を報道することによって，結果的には反乱軍を支持することになったのである。そして共和国軍の教会関連施設破壊活動，聖職者殺害や反乱軍の支配領域での宗教政策実施の模様等を数週間から数ヶ月遅れで取り上げ，距離的には離れたところで起きた戦争ではあったにせよ，カトリック信徒という共通性を持つ兄弟たちが自らの生命をかけて戦っている内戦を，より主体的・内在的に捉える契機を日本の読者に与えようとしたのであった。

それでは以下に主要なテーマ別に，記事内容を具体的に見ていくことにしよう。

2. 反共産主義への呼応

さて『日本カトリック新聞』では，スペイン内戦の勃発は 1936 年 9 月に入って報道された。『東京朝日新聞』『東京日々新聞』等の新聞は同年 7 月 19 日付記事でモロッコでの軍人蜂起を取り上げているから[15]，それと比較するとカトリック出版物の報道には速報性という利点はまったくなかった。となれば，ニュース性に欠ける事件，しかも日本とは離れた国での出来事であり，直接的に日本人の日常生活を左右するとは考えられないスペイン内戦を，なぜカトリック出版物が積極的に取り上げたのか，その理由を考えねばならないだろう。

ここで当時，日本社会でカトリック教会が直面していた状況を考えてみたい。[16] カトリック教の存続のためには，大日本帝国の政策とカトリック教会の方針との間に矛盾があってはならなかった。というのも，カトリック教は「外

14) 『カトリック』第 16 巻 9 号，昭和 11 年。
15) 川成洋編『資料 30 年代日本の新聞報道 . . . 』p. 16.
16) 15 年戦争におけるカトリック教会の姿勢を問い直す文献としては，以下を参照されたい。西山俊彦『カトリック教会の戦争責任』サンパウロ，2000 年；同『カトリック教会と沖縄戦』サンパウロ，2001 年。

来宗教」であるため，日本の社会制度には合わないと考えられることによって，教会組織また信徒には政治的に抹殺される恐れがあり，また世間から排斥される可能性もあったからである。信徒数からいえば当時の日本社会ではまったく目立たないはずの信仰の共同体であるカトリック教会は，[17] その聖職者の多くが外国籍であることで大きく注目され，スパイの温床ではないかという嫌疑を受けるようになっていた。[18]「支那人」への布教のために満州に派遣された外国人宣教師たちに対するスパイ容疑が高まるなかで，[19] 信徒たちには，その根深い疑いを打ち消すだけの愛国的根拠を示すことが求められていた。ともすれば，純粋な大和魂・日本精神の高揚には外国産の宗教は不要である，という考えが蔓延しがちな社会においては，カトリックの教勢を維持するためには聖職者と信徒が力をあわせ，社会からの非日本的宗教への批判に対抗する必要があった。[20] 1935 年 4 月 25 日付けでだされた「全日本教区長の共同教書」は「外人宣教師はわが国の土と化すべき決意を以て立働きつつあるのでありますが故に，大日本帝国民と異ならぬと言い得べく，内外人の差別は全く無いのであります。」[21] として宣教師スパイ説の否定に懸命であった。その上で，できる範囲で外国人司祭を日本人司祭に置き換え，教会の日本化を図る方針を示した。[22]

17） 田口芳五郎『日本カトリックの現勢』東方書院，昭和 9 年。この報告書によれば，昭和 4 年 7 月の調査での信徒数は 98007 人であった。またこの数値には台湾在住の信徒 5845 人も含まれている。

18） 日本国籍を有しない高位聖職者の率は非常に高く，例えば日本人初の大司教の誕生は，1938 年の土井辰雄の任命を待たねばならない。

19） 『日本カトリック新聞』395 号，昭和 8 年 5 月 7 日，p. 1. 菱沼浮葉は「カトリック宣教師は帝国主義の走狗か」と題した論説で，朝鮮総督府ができた折も独立運動に参加したのはプロテスタントの牧師たちであり，カトリックの神父たちは不参加であったと主張し，満州でのカトリック宣教師のスパイ説を，他のキリスト教教派に責任を転嫁する形で否定した。

20） 例えば同時期に奄美大島でカトリック信徒が受けた排撃と強制改宗の事例からみても，当時世論が外来宗教批判へむかっていたことは明らかである。この排撃に関しては次の文献を参照されたい。宮下正昭『聖堂日の丸：奄美カトリック迫害と天皇教』南方新社，1999 年。

21） 『日本カトリック新聞』500 号，昭和 10 年 5 月 12 日，p. 5.

22） カトリック中央協議会福音宣教研究室編『歴史から何を学ぶか：カトリック教会の戦争協力・神社参拝』新世社，1999 年，pp. 67–68.

特高調査の存在に代表される当時の監視社会にあっては,[23] 外来宗教であるカトリック教は日本人にとっての異物として排除される可能性を持っていた。よって日本カトリック教会は，信徒の全般的能力の高さを社会に喧伝すると共に，信徒自身への臣民意識の定着を促すことで，世間の不信や非難を避けようとした。信徒たちが八紘一宇に基づく愛国精神を持ち，国策に従順であることを信徒以外の人々に認めさせることが必要だと考えたのである。[24]

こうして「カトリック的臣民」を作り上げるための過程では，カトリック教会は信徒に神社参拝を容認し，紀元節には祈願祭を開催した。満州で信徒が「名誉の戦死」を遂げた折には，靖国神社へ合祀された。[25] 教会は「政府も軍部も日支事変には侵略主義的な意図はないとしているのであるからそれは侵略戦争ではない」と理解し，日本の「生命線」としての満州国を肯定的に理解した上で，「日支の友好はカトリックより」をスローガンに謳ったのである。[26]

その一方で，教会は，教皇庁の指示に従って反共産主義の前衛に立つことも忘れてはいなかった。1937 年 3 月発布の回勅『ディヴィニ・レデンプトーリス』は日本のカトリック出版物に，反共運動の重要性と正当性を主張する契機を与えたのだった。[27]

23） 特高報告によれば，カトリック教会の日本化運動は低調であるとされている。参照：明石博隆・松浦総三編『昭和特高弾圧史 3 宗教人に対する弾圧・上 1935–41 年』太平出版社，1975 年，p. 132.

24） 『日本カトリック新聞』338 号，昭和 7 年 4 月 3 日，p. 2.「論説：愛國心とカトリック」はこう述べている。「我等カトリックは公的生活に於いてもこの熱烈なる愛國心を十二分に發揮することが出來る。公的生活に於いては，或いは國家の選長として，或は官吏として或は勇敢なる兵士として，天主の聖寵と自己の天實才能を發揮しつゝ報國の眞を發見し得，私的生活に於いては先づ自己に課せられたる職務を忠實にして，國民としてすべての義務を完全に励行し，殊に長くも，天皇陛下各皇族及び國民全般の安康と國運の隆盛を神に祈求することに由つて，立派なカトリック日本國民となることが出來るのである。」

25） しかしこれで，自己の良心に従って個人的に疑問を抱いていた信徒がいる可能性が打ち消されるものではない。

26） 『日本カトリック新聞』320 号，昭和 6 年 11 月 29 日，p. 2.「論説：在満の将士を慰問し平和的解決を祈求せよ」を参照。またここでは，満州がカトリック教の新たな宣教地となる可能性を秘める土地でもあったことを考慮する必要がある。

27） 本回勅は 1937 年に田口芳五郎神父によって訳され『ピウス 11 世回勅無神的共産主義を排す』として定価 20 銭でカトリック中央出版部から発行された。宣伝には

こうして共産主義に対する防衛の旗印の下にあって，日本のカトリック出版物は，信徒は国防の実をあげうる帝国臣民であると証明しようとした。その主張は，完全な臣民として認められたいという，社会的地位の改善を求める信徒の願望から生まれたものでもあった。[28)]

このような時代背景の下に，カトリック出版物は，スペイン内戦こそは反共産主義に基づく重大な戦いであり，正戦であり，また聖なる戦いである，というイメージを定着させようとした。こうしてスペイン内戦は，日本のカトリック信徒が社会的認知を受け，立派な「日本帝国民」[29)] となるための一手段として使われたのであった。つまり，スペイン内戦に関する一連の報道は，カトリック教会の自己防衛策の一環として機能したともいえよう。背後にある政治的文脈はさておき，教皇が願い，また日本政府も望んだ反共産主義的運動を，日本のカトリック教会は言論活動を通じて展開しようとしたのである。こうして遠いスペインでの事件は，もはや単なる対岸の火事ではなく，カトリック教会の存在意義を社会に顕示し，証明する重要な要素へと変化していった。[30)]

「全人類の脅威，無神的共産主義をカトリック的世界観から完膚なきまでに反駁し，社會問題に對する快刀亂麻を断つが如きカトリック的解決原則を力強く絶叫する現教皇の聲を聴け !!」という文句がうたれている。

28） 共産主義に対抗する手段として，カトリック教の有効性は折りに触れて強調された。「思想對思想戦である関係上，ボルシェヴィズム，ソシアリズム，の基調とする唯物主義及び唯心主義を徹底的に打破し得る思想を以て，かうした希望満々たる國防研究會の理想を十二分に實現化せねばならぬ。唯物，唯心両主義の如き最も深厚なる哲學的思想に徹底的に，恒久的に抗争し得る思想は何処に見出されるべきかを慎重に研究すべきか，又重大問題たらねばならぬ。我等は，教育勅語にもある如く「知識を世界に寛めて」あらゆる正當手段を以て，殊に赤化運動に對し，國防の實を擧げるやう粉骨身せねばならぬ。」『日本カトリック新聞』381 号，昭和 8 年 1 月 29 日，p. 2.「論説：思想善導への官民共同戦線」を参照せよ。

29） 『日本カトリック新聞』338 号，昭和 7 年 4 月 3 日，p. 2.「論説：愛國心とカトリック」を参照せよ。既に述べたように，ここでは立派なカトリック日本国民となるには「天皇陛下各皇族及び國民全般の安康と國運の隆盛を神に祈求する」必要があることが述べられている。

30） カトリック出版物では 1931 年 4 月の第二共和制成立より，スペインの反教権的暴動・政策とその弊害を述べた記事が随所に見られるようになっていた。また第二共和制成立＝「革命」，共和政府＝革命政権という図式で状況を捉えていた。

3. 在日聖職者を媒介とする情報網からもたらされた記事

既に述べたように，日本のカトリック出版物には，スペイン内戦勃発直後は，特定の陣営を支持することを避けようとする雰囲気があった。[31] しかし教会では，教皇ピウス 11 世のカステルガンドルフでの発言を機に[32]，反乱軍の正当性が認められたと考えることができる。このことは，日本政府がフランコ政権を承認したのは 1937 年 12 月 1 日であるが[33]，それ以前に既に日本のカトリック出版物がフランコ軍事政権を「国民政府」と呼んでいたことからもわかる。[34] また日本政府による承認の翌日には，在日スペイン公使館ではカトリックの儀式をもって祝別されたスペイン国旗の掲揚が行われ，新国家スペインを担うカトリック的政権たるフランコ政府の誕生が祝われた。[35]

日本のカトリック出版物は，フランコ軍成立の発端が第二共和国政府に対する「反乱」にあったことは認めている。その上で，彼らの引き起こした第二共和国政権に対する反乱を正当性なものとして擁護している点に注意する必要がある。[36] 日本のカトリック出版物は，反共という共通項から反乱軍を支持しつつ，内戦報道の姿をかり，枢軸国の防共協定に正当性を認め，カトリック教が日本の国内のみならずアジア地域においても反共運動を撲滅するのに大いに役

---

31) 『日本カトリック新聞』569 号，昭和 11 年 9 月 13 日，p. 1.「此度のスペイン動乱に於いても，純粋の政治的事由の外に，かうしたイデオロギー的要素が相當織り込まれてゐるらしいので，事態の眞相は相當複雑性を帯びてゐるものの如くである。此の故に我等はカトリック的見地から，具體的にスペイン動乱を論じやうとするものではなく，又論ずることさへ出來ないのである。」また同様の論理は『カトリック』第 16 巻，9 号，昭和 11 年にもみられる。「我等が或る一部の人々から聞知したところに依れば，此回のスペイン動乱に於いては，政府其の物は全的に共産的ならざるも共産主義に全く牛耳られ，殆んど彼等が為すがまゝに任せてゐるといふ。こゝにもこの動乱の謎が秘められてゐるのであるが，我等は事實の眞相を窺知しないから，事實問題を批判の俎上に上げることを一切避けたいのである。」

32) スペインからの亡命者との謁見における演説。ラジオで放送された。

33) 塩崎弘明，前掲書，p. 263.

34) 例えば『日本カトリック新聞』は 1937 年 5 月 16 日付 604 号でブルゴスにおけるフランコ政権を「国民政府」と呼ぶことを厭わなかった。

35) 『日本カトリック新聞』635 号，昭和 12 年 12 月 19 日，p. 2.「翻れスペイン國旗」を参照せよ。この式は「歴史的祝別式」として報じられている。

36) 例えば『日本カトリック新聞』以外でも，反乱軍を「反政府軍」と呼んでいる。『炉火』昭和 12 年 5 月 1 日号，p. 226.

立つ存在であることを提示しようとしたのである。

このようにカトリック出版物は，本来の宗教的布教活動の域を超えて反共宣伝活動を行いつつ，フランコ将軍率いる反乱軍を支持し，ひいては反共産主義のカトリック的共同戦線をつくることができれば，ヨーロッパでの思想闘争の経験が活かされ，日本の共産主義勢力の弱体化に貢献できると考えていた。[37] こうして反共運動の必要性は，1936 年 11 月の日独防共協定締結前後からカトリック出版物の中で繰りかえし話題にされていった。[38] 東京-ベルリン-ローマを貫く防共軸を強化し保護するために，スペイン内戦のもつ反共の戦いという側面を都合よく活用しようとしたのである。

このような時代背景のもと，内戦報道に関するカトリック出版物の特徴的な試みは，日本在住のカトリック聖職者から情報を得ていることである。[39] ここでイエズス会士，ドメンサイン神父の例を見てみよう。[40] 1936 年 8 月 13 日にスペインを出国し，日本にやってきたドメンサイン神父は，『日本カトリック新聞』の記者に内戦の経過と共産軍の壊滅を願う気持ちを語った。ドメンサインによれば，反乱軍に加わった王党派やファシストはスペインを救う「義勇軍」であった。また彼らの戦う様子や，市民たちがその「義勇軍」の勝利を願って

37）『日本カトリック新聞』571 号，昭和 11 年 9 月 27 日年，p. 1.「我等は飛躍的にカトリック教に無理に入信せよと言ふのではない。然し，カトリシズムが有力な武器であるとするならば，之を思ひ切つて使用せよといふだけである。かうした思想的武器を手にしてこそ，全人類は最も友好的に反共戦線を強化し得るのではなからうかと思ふ。」

38）尚『日本カトリック新聞』は協定調印を第一面トップ，全文引用で伝えている。同 581 号，昭和 11 年 12 月 6 日，p. 1.

39）当然このカトリック聖職者の情報ソースにはフランコ反乱軍を支持する人々が多かったといえる。

40）モイセス・ドメンサイン（DOMENZAIN YÁRNOZ, Moisés, 1900–1970）: パンプローナ神学校，コミーリャス大学で学び，司祭叙階。聖職者宣教連合事務局長。アクシオン・カトリカ司教区事務局長。スペインでイエズス会が追放された後，入会のため 1931 年ベルギーへ渡る。1936 年 9 月来日。以後広島・山口において宣教活動を行う。1939 年 7 月スペインへ帰国。1948 年再来日。1969 年勲 5 等瑞宝章を受章。O'Neill, Charles E., Domínguez, Joaquín M. (eds.) *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús*, Roma y Madrid, Institutum Historicum SI, UPCO, 2001, vol. II., p. 1137.

祝典を行う様をたとえて，「あたかも中世に聖地奪還を叫んで立つた十字軍そのもの」であった，と述べている。[41]

また，フィリピンの聖トマス大学総長サンチョ神父は，既に 1937 年の時点で，フランコ将軍は熱心に宗教的実践を行うので内戦に勝利する，と確信した。[42] サンチョ神父は 1936 年 2 月にスペインからマニラに渡り，1941 年夏までスペインには戻っていないため[43]，彼がフランコ個人の信仰心の度合に関して，どこで情報を手に入れたのか正確には不明である。しかし『日本カトリック新聞』は「過般スペインより帰った」聖職者の言としてその主張に権威を持たせている。[44]

また日本にいるスペイン人修道女が受け取った手紙も取り上げられた。もちろん掲載されるのは反乱軍側での参戦者の手紙であり，スペインの伝統である宗教を守り，神と祖国と家庭を擁護する戦いとして内戦を表象する内容のものが多かった。[45] 中でもカトリック教会に対する暴力の犠牲者の話は，美談として頻繁に用いられた。例えば聖體礼拝会の修道女，カルメン・ルイス・カノに届いた弟の訃報は「殉教の花」というタイトルで『日本カトリック新聞』に 2 度のシリーズに分けて取り上げられた。[46] 記事ではグアダラハーラ近郊のギホ

41）『日本カトリック新聞』571 号，昭和 11 年 9 月 27 日，p. 2.

42）『炉火』昭和 12 年 10 月 30 日号，p. 270.「(反共産軍の)勝利のかげに同[フランコ]将軍の信心行を見るに，将軍は毎朝ミサ聖祭に与り毎日夫人，子供及び首脳部の要人と共にロザリオの祈を唱えている」なお，この記事ではシルベストル・ペンシュという名前が採用されているが，彼がスペイン国籍のドミニコ会士であることから Silvestre SANCHO MORALES を通常一般のカタカナ表記にして記す。

43） なおサンチョ神父は，1941 年末に休暇でスペインに一時帰国している間に日米が開戦したため，フィリピンへ戻れなくなった。

44） ドメンサイン神父，サンチョ神父共に，内戦終結後のスペインでは，日本，引いてはアジア社会への理解を促そうとした。Cf.: Rodao, Florentino, *Ibid.*, pp. 143–144.

45）『日本カトリック新聞』613 号，昭和 12 年 7 月 18 日，p. 3.「開戦當時から今日に到るまで，我がスペイン王國と我等の古き傳統を守るため全く寧日なき思ひで戦つてをります。それは，神と祖國と家庭の擁護のために！ これ等の責は我等の生命で，野獣にも等しい彼等共産主義者指導者等の手に渡さるべきものではありません。」

46）『日本カトリック新聞』625 号，昭和 12 年 10 月 10 日，p. 3; 同 626 号，昭和 12 年 10 月 17 日，p. 3.

サにあった小神学校で教鞭をとっていた聖心会のホセ・ルイス・カノ神父の殺害に言及し，聖職者虐殺の模様を描きだしている。記事は共産主義者は「悪人」であると定義し，自分の命を投げ打って子供たちを助ける師の姿を理想的なキリスト者像として描いている。また，カプチン会のガルダーカノ修道士が 1936 年 8 月 6 日にアンダルシア地方アンテケラで殺害される前に残した手紙は，その死の 11 ヵ月後に『日本カトリック新聞』に掲載されている。[47] それは，宗教的信念のために命を擲つことへの支持を読者に訴えかけるには十分な題材であり，また肉親の犠牲的な死を乗り超えて銃後の守りに徹する母親を理想化するものでもある。「併し母上，私のこの肉體は死するとも，貴女は，その愛児を尊き御主の殉教者として捧げ得たこよなき名誉を思ひ起して自ら慰めて頂きたい。」「互に愛せる者達が総て帰天の日，再び大いなる愛に抱擁されんことを主に乞い奉つて。ではその日の再會を約して，御主とその教會のため潔く殉教の十字架を背負うて御別れ致します。」[48]

このような殉教の物語は，日本の信徒がスペインの信徒に同情する環境を作り，反教権主義的暴力に対する批判・ひいては共和国軍を批判する態度へと彼らを導いた。また日本の信徒の間に，自らが「正義」とする宗教的信念のために命を賭す男性像を理想の人間像として提示する一方で，殉教死の名のもとに，戦闘による人間の死を美化するメンタリティを育てるのに一役かった。

4. 内戦の宗教的要素を可視化するために

日本のカトリック出版物は，反乱軍側が日常化する戦いの中でカトリック教を伝統的習慣として人々に再び課していく模様をよく報道した。それと同時に，共和国軍側の破壊的暴力行為によって教会が受けた被害の状況をコントラスト鮮やかに描いたのだった。

その中でも，写真を用いた記事とそれに付随する説明文は，共和国軍の暴力

47） Montero Moreno, Antonio, *Historia de la persecución religiosa en España, 1936–1939*, (3ed.), Madrid, BAC, 1999, p. 287.

48） 『日本カトリック新聞』612 号，昭和 12 年 7 月 11 日，p. 3.

を視覚から読者に具体的に印象付けるための手段として用いられた。例えば「眼で見るニュース」を販売スローガンにした『カトリック画報』は，首の落ちた聖像や跡形もなく破壊された教会の写真を掲載することで，共和国軍が行った「共産主義の蛮行」を日本の信徒に提示している。また解説文は「教會堂，修道院の破壊数四萬，殉教者は百五十萬にのぼる」と推測し，また共産党員は「聖堂を破壊し，聖職者を殺戮すれば，彼らのユートピアがスペインに實現出来るものと信じ」たので，「あらゆる宗教的なものは無惨にもその暴動の犠牲となつたのである」としている。[49)]

確かに共和国軍はカトリック教の代表的建造物を破壊した。例えば，マドリード郊外セロ・デ・ロス・アンヘレスにあったイエズスの聖心像は「銃殺刑」に処されたが，これは1919年に国王アルフォンソ13世が諸大臣とこの聖像の序幕式に参加したことに象徴される国家と宗教のあり方を否定し，教会の権威に反抗する共和国軍側の意思表明であった。[50)]

このように共和国軍側の反教権的暴力行為を写真に記録し，それを使用することによって読者の視覚に訴える姿勢を前に，私たちが事実を考察する折に今後考えるべき課題が提示されていると考えよう。確かに，共和国軍の兵士による反教権主義的な行動は，多くの場合暴力行為を伴い，また聖職者を殺害し，聖像や教会・修道院の建造物を破壊した。しかし写真を資料にしてこのような破壊行為の「主体」となったのは左派・共和国軍だけであったと言い切ることはできない。教会建造物は共和国によって，宗教とは離れた，共和国側の指令施設設置などの用途に使用されることも多かった。市街戦における激しい戦闘では，銃撃戦の的となった共和国利用の教会建築物が反乱軍によって襲撃され，破壊された可能性も大きい。実際，例えばアルカラ・デ・エナーレスのシス

49）「戦慄のスペイン」『カトリック画報』昭和13年5号。原典は写真横に見られる原注から，フランス語の出版物であることだけがわかるが，原典の書名等詳細は不明。

50）アルフォンソ13世が行ったのは，イエズスの聖心へのスペインの奉献式であった。Lannon, Frances, *Privilege, Persecution and Prophecy. The Catholic Church in Spain 1875–1975*, Oxford, Clarendon Press, 1987. 共和国軍側が像を銃殺する模様を撮影した写真は本の表紙を飾っている。

ネーロス枢機卿の像は 1936 年 11 月のマドリード攻防戦下で反乱軍側の爆撃によって破壊された。[51] またバスクのドゥランゴにあったイエズス会教会の爆撃を行ったのは反乱軍である。[52] しかし日本のカトリック出版物が反乱軍側の教会への暴力に言及することはなかった。[53]

5. 日本におけるカトリック青少年の人格形成へむけて

青少年向けの雑誌でも視覚効果を狙った記事が見られる。例えば，カトリック中央書院から小学生向けに発行された月刊子供雑誌『海の星』は「よきカトリック」としての理想のこども像として，あるスペインの幼児の写真を使用した。[54] この 3 歳の子供は「軍服」を着て，右手を上げて，ファシスト式とも理解しうる挨拶をしている。家族の肖像の一枚として撮影された写真は，その家族の手を離れ，日本のカトリック教会の置かれた状況に合わせて都合よく解釈

51） この反乱軍による攻撃では他にも例えばサン・セバスティアン教会などの建造物が爆撃・破壊されている。またプラド美術館は 2003 年 6 月 27 日から 9 月 14 日まで内戦期のマドリードからの美術品の疎開に関する写真その他の資料を公開した。資料は明らかに反乱軍側の攻撃が決して教会建造物を保護するものではなかったことを物語る。参照: Argerich, Isabel, Ara, Judith (eds.), *Atre protegido. Memoria de la Junta del Tesoro Artístico durante la guerra civil*, Madrid, Instituto de Patrimonio Histórico Español, Museo del Prado, 2003.

52） El Comité Ejecutivo Nacional del Socorro Rojo de España, *¡Queman, roban y asesinan en tu nombre! Religión y Fascismo*, 1937. 司祭フアン・ガルシア・モラレスによって記され，1937 年 6 月に 20000 部印刷されたこのパンフレットには，アルカラやドゥランゴでの事件の写真が掲載されている。

53） 例えば，戦乱のためゲルニカの人口は 5000 人から 1000 人に減ったにもかかわらず，教会寄付金が増えつつあるのは反乱軍のおかげである，という主張が掲載されている。これは「スペイン人の奇篤」が導いた増加であると報告した。しかしこの記事には，ゲルニカ空爆撃が反乱軍側を援助するドイツ軍・コンドル部隊によってもたらされたものであることへの言及はない。『日本カトリック新聞』705 号，昭和 14 年 4 月 23 日，p. 1.

54） 『海の星』昭和 12 年 8 月号，p. 6. 尚，写真の解説文は以下の通り：「表紙裏，口繪の寫眞(中)は東京聖體禮拝會のヴィクトリア童貞様の甥にあたるアロイジオ君(三才)ですアロイジオ君のお國スペインでは，皆様ご存知の通り共産軍と義勇軍が戦つて居りますが，義勇軍が勝つた土地では–會もぼつぼつ建てなほされて學校でも，教室に十字架や聖母マリア様の御像をおくことになりました。生徒たちは，アロイジオ君の様な勇ましい服を着て兵士といつしよに「王たるキリスト萬歳！　スペイン萬歳！」を叫ぶのです。」

され，掲載されることとなった。この写真に付随する，カトリックの子供信徒であれば「王たるキリスト萬歳！ スペイン萬歳！」を叫ぶことを必ず支持するべきであるかのように記述された解説文は，「スペインという国のカトリック的一体性」という点を明確に提示する一方で，カトリックの信仰を持たない，もしくはそれを表立っては表明しないスペイン人の存在を，子供たちに考えさせる余地を与えない。

また『海の星』にはフランコ将軍率いる反共の軍隊への忠誠を謳い，その勝利のために死んだ少年を主人公とする小説も連載された。宇上邦夫著，近藤啓二挿絵による「少年伝令」がそれにあたる。[55] 主人公はヒューズ伯爵の甥ラングという男の子で，彼がマドリードにおこった空襲の折に叔父からフランコ将軍へ親書を渡すよう頼まれ，それを実行する，という筋立てになっている。当然これは架空の物語である。登場人物の名前，「ヒューズ」も「ラング」も，スペイン人の名前とは考えにくい。また内戦開始から半年，という設定なので，この出来事が起こったのは 1937 年初めの 1・2 ヶ月にあった事件として考えられるだろうが，歴史的事実を無視したストーリー展開になっている。[56]

この物語では信念のための死が美化されている。主人公の宗教的愛国心を強調し，人々は彼の死を英雄の死として悼むのである。幾多の困難を乗り越え，ラングがあと少しでフランコ陣営に到着という段になって，いきなり敵が現れる。彼は撃たれて致命傷を負いその場に倒れるが，少年伝令としての役割を果そうとする。ここでは，「殆ど気を失っていたラングが急に起き上がろうとするのを止める兵士の手を振り切って『フランコ将軍閣下，ヒューズ伯爵から伝令です！』と云つて上衣のポケットからヅブ濡れになった手紙を取り出し，右の手に持ち直して将軍に手渡したとき，ラングはガックリ倒れました。」と記されている。またフランコ将軍は死んだ少年を見て「偉いスペインを救ふ小英雄だ」

55）『海の星』昭和 13 年 8 月号から昭和 13 年 11 月号にかけての連載。英語の物語を翻訳したものと思われるが，原典不明。

56） 話の筋書きの矛盾は非常に多いが，一つの例をあげておきたい。少年が道で出会ったバスク人はバスクでの共和国軍による教会関連建造物の破壊を嘆いているが，実際，この地域では既に述べたように，反乱軍側の爆撃による破壊が多かった。

と述べている。

このラング少年の物語は，大日本帝国の初等教育科目『修身』で使用された「死んでもラッパを放しませんでした」という日清戦争時の「英雄」，「木口小平」物語を思い起こさせる。[57)]

こうしてスペイン内戦という事象は，既に使われていた戦争賛美の言説を強化するために再利用され，カトリックの子供たちが大日本帝国臣民となるにふさわしいメンタリティを育むための一手段として使用されたと考えることができる。

6. 日本のカトリック信徒の反応

これらの報道に対する信徒の反応はどうであったか。出版物を通して知ることのできるものは少数である。例えば『日本カトリック新聞』の投稿欄に採用された意見からは，日本の信徒の中には，カトリック教擁護の戦いを繰り広げる反乱軍の正当性を信じて疑わず，彼らを神の子とすら喩えた者がいたことがわかる。[58)]

また反乱軍への具体的な支援活動も起こった。1938 年には，東京麹町教会の未婚女性の信徒団体である「テレジア会」が，フランコ陣営の兵士へ慰問袋を送った。また，これに刺激されて，東京カトリック連合婦人会も次いで慰問袋を送ることになった。そして，このような動向を背後から支えたのは，在日のスペイン人修道女たちであった。[59)]

57） また，ラッパ卒の人物像歪曲については，中村紀久二編『復刻国定終身教科書解説』大空社，1990 年，pp. 123–126.

58） 『日本カトリック新聞』636 号，昭和 12 年 12 月 26 日，p. 4. 自由論壇の欄に米子痛憤王の名で掲載された投書は次のように語っている。「もとよりスペインの革命に世俗的，政治的要素の混ぢつてゐることは事實だ。然れども眞相は悪魔に對する神の子の決戦である。我等は神の子の最後の勝利を確信してゐる。何物をもつてしても天の門に勝つべきものはあり得る筈はない。」

59） 『日本カトリック新聞』643 号，昭和 13 年 2 月 13 日，p. 1.「暴虐共産政府に奮然防共の聖旗を翻したフランコ将軍下のスペイン義勇軍はいよいよ首都マドリッド攻略を目指して総攻撃の體勢を示してゐるが，過日このマドリッド戦線から「優しい日本の女性たちよ，貴女達が皇軍に捧げる銃後のまごころを同じ防共の聖戦に苦闘を続ける私たちスペイン義勇軍にも送つて下さい」と遙々海を渡つてハイメ・ミラ

信徒の中でも，フランス語や英語の文献に直接接することのできる状況にあった知識人は，日本語の出版物しか読まない者に比べれば，内戦に関するより多くの情報を得ていた。しかし，このようにして信徒が得た情報量の差は日本語で書かれた出版物の見解と大きく異なる意見を知識人に持たせることにはならなかったようである。

例えば，フランスのカトリック知識人の間では反乱軍側の大義に対する熱狂的支持・共和国軍へ同調する立場・中立を守ろうとする考えなどが存在し，亀裂が生まれていた。[60] これら知識人の中には，反乱軍を批判した哲学者マリタンなども含まれる。ところで，当時上智大学専任講師だった小林珍男は，マリタンの内戦に対する見解を批判している。[61] マリタンはスペイン司教団集団司牧書簡に示されたスペインの高位聖職者によるフランコ陣営支持・内戦の「聖戦化」の姿勢を批判し，カトリック信徒は，両陣営どちらの側に立つでもなく「第三の道」として中立の立場を維持しつつ，内戦の終結へ向けて両陣営へ圧力をかけるべきだ，と考えていた。小林はこのようなマリタンの意見を「共同書簡の所謂曲解の部に属すべきもの」[62] として紹介した。

小林のみならず，一般に，日本のカトリック知識人はフランコ陣営を支持していたと考えうる事例をもう一つ挙げたい。1937 年から 1938 年にかけて国民使節としてヨーロッパを歴訪し，日本軍の行動を真理と正義を伴う義の戦いとして世界に伝えようとした山本信次郎は，フランコ軍を義勇軍と呼び，その士気の高さを評価した。[63] またフランコ陣営での銃後の守りや農村の様子を見て

ンス・デル・ボッシ大尉，ウバルド・デ・ミエール少尉の二将校が駐日スペイン代理公使フランシスコ・デル・カスティーヨ氏のもとに日本女性の声援を求めた手紙を寄せて来た，この報を知つた東京麹町教會処女會の「聖テレジア會」では早速激励の手紙をおくつてマドリッド戦線の勇士たちを慰めることとなつた。」

60） フランス・カトリック知識人の言動については，渡辺和行『フランス人とスペイン内戦』ミネルヴァ書房，2003 年，pp. 297–304.

61） 小林珍雄『カトリシズムへの架け橋：小林珍雄遺稿・追悼文集』エンデルレ書店，1981。巻末に著作目録あり。

62） 小林珍雄「マリタンの『聖戦』論」『三田文学』昭和 13 年，第 13 巻，p. 135.

63） 山本信次郎（1877–1942）は海軍少将。外交官。御学問所御用掛として昭和天皇の皇太子時代の教育にあたった。彼の生涯に関しては，山本正『父・山本信次郎伝』中央出版社，1993 年を参照されたい。

「実に頼もしく思はれたのであります。」と記すほど，反乱軍のもたらした「正義」に同調していた。[64] 山本は，カトリック信徒であるならば，教皇庁が外交関係を維持しているフランコ陣営を支持するべきだと述べた。またフランスのカトリック知識人を中心とする反フランコ陣営の人々の主張が，日本の中国侵略に反対する勢力の言い分と類似しているとし「丁度，日支問題に就て支那人の情報を鵜呑にして日本に反對されて居るのと似て居るのであります」と指摘している。[65]

また前述したフランス・カトリック知識人の中立派は，内戦末期にフランスのリールやベルギーのルーヴァンで「スペイン戦乱問題に關するカトリック教徒討論會」を開催した。この会議では，カトリック信徒が自らの良心に基づき共和国陣営・フランコ陣営の双方の側に平和を働きかけるとする決議が出された。『日本カトリック新聞』はこの会議開催の記事を掲載したが，一方で決議に関しては意見を述べるのではなく，その本文を忠実に日本語に翻訳しただけであった。[66]

64）『日本カトリック新聞』642 号，昭和 13 年 2 月 6 日，p. 1.

65）『日本カトリック新聞』695 号，昭和 14 年 2 月 12 日，p. 2.

66）『日本カトリック新聞』705 号，昭和 14 年 4 月 23 日，p. 1. 決議の内容は次の通り。「一，黨派的熱情によつて淳化せられし出所より得し報道を引用するに於いては其の責任は自ら之を負ふべきこと / 二，教會の迫害者及び教會を利用して己が利益を画策する爲に教會を庇護して結局教會に危害を處するが如き行為に出づる事に於いて防護すること / 三，交戦両軍間に絶えず平和を招来すべく働きかけ，怨恨と復讐心とを全く離れ去つて相互に兄弟的和解をなさしむるやう努むること，如何となれば，精神的勢威を保有してゐるカトリック教徒は物質的並に倫理的破壊の勢威を改善し得べきであるから / 四，戦乱の続く限り，カトリック者にとつては之を停止せしむるやう努力する以外に尚他に果たすべき義務がある，即ち何百萬の難民の窮迫と飢餓と主として戦争と革命とによる無限の犠牲は愛の原理的義務實践の時機を展開してゐるのである，ゆえに飢饉に悩みつゝある非戦闘員を救済すべきである，若し非カトリック教者が此等の難民救済に団結して起つたなら，殊に基督教徒のなすべき事業からカトリック教徒は除外させられた形にならざるを得ないことになつて了ふ，死より猶救ひ得べき婦人及び児童に或憐憫を示す義務こそ強く叫ばるべきである」

おわりに

こうして，日本のカトリック出版物が行ったスペイン内戦に関する報道を概観することで明らかになるのは，戦争の行方が判断できなかった勃発当初の一時期を除き，これら出版物の多くがスペイン内戦を反乱軍側に立って報道したこと，また，内戦終結後もこの姿勢は基本的に変わらなかった，ということである。内戦は1939年4月1日にフランコによる勝利宣言により一応の終結を見たが，[67] 日本のカトリック出版物は，スペイン国内で共産主義勢力が制圧されたことに歓喜する聖職者や信徒たちの姿を報告している。例えば，在日スペイン人司祭や修道女を擁する司教区では，スペインで「防共の聖戦」が勝利し「秩序ある平和」が訪れたことは，スペインへの神の恩寵によるものだとして，感謝の祝賀行事が次々と行われた。[68] また台湾等日本の植民地支配下に組み込まれていた地域でも同様に行事が行われた。[69]

反乱軍の勝利に帰したスペイン内戦は，日本のカトリック教会にとって重層的な意味を持つ事件となった。スペインを故国とする教会関係者にとっては，スペイン内戦は自分たちのカトリック的スペインの全存在をかけて戦われた聖戦であった。また，内戦の原因は共和国下のカトリック教会に対する残忍な暴力的迫害であったのだから，教会を守るためには，戦闘は不可避な必要悪であった，という見解は，彼らの情報網から出版物を通して日本に伝達された。その結果，日本人のカトリック信徒の間にも，この見解を主体的に内在化させるものが現れたのである。と同時に，内戦報道を通じて，カトリック教会は反共産主義の戦いに積極的に参加する政治的勢力であると示すことを通じて，日本的精神から逸脱する外来の信仰集団と捉えられていたカトリック信徒を，大日本帝国を構成する正当で主体的な皇民集団として社会に認識させる機会を得ようとしたのである。

67） 北部戦線ではこのあとも戦闘地域として，共和国軍の残存勢力がゲリラ的抵抗を続けた。

68） 四国の松山教区などがその例である。『日本カトリック新聞』706号，昭和14年4月30日，p. 2. 尚，フランコの肖像写真入りの記事である。

69） 同上。

戦闘は陰惨極まりない様相を呈し，スペインを分断した。しかし日本のカトリック出版物には，共和国軍側の行った宗教迫害の不正と反乱軍が再びもたらした宗教的秩序と安寧とが対照的に描かれる一方で，フランコ陣営の暴力によって共和国陣営が置かれた悲惨な状況は記述されていない。実際には，共和国軍によるとされた教会建造物の破壊行為に象徴される暴力的攻撃の原因には，両陣営における政治的思惑・戦略上の展開・民衆心理などが重層的に絡んでいたのであり，その被害状況や攻撃実行に関する責任の所在についても詳細な分析が必要であったはずである。

内戦を戦う主体に関連する事象を善悪の二項対立的視点のみで語ることができないのは，周囲の状況から偶発的に戦いに組み込まれ，否応なく主体化させられた人々が存在したことからも明らかである。こうしてフランコ陣営寄りで報道されたスペイン内戦は，日本のカトリック信徒の中にフランコ陣営を支持する心を芽生えさせる役割を果たした。と同時に，結果として，スペイン内戦に関する報道は，カトリック教会が日本社会での認知を模索する過程において社会的・政治的闘争の道具として使用されたのである。このような点から，日本のカトリック出版物の内戦戦争報道の偏向に関する責任の所在が問う姿勢が求められよう。

小稿で挙げたいくつかの点をより詳細に吟味しながら考察し，日本という「他者」からみたスペイン内戦を記録することは，既にあるスペイン像を「更新」するためだけに有効であるのではなく，結果として 15 年戦争期の日本カトリック教会の姿勢を考える糸口にもなろう。

尚，小稿は，平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究 B）「20 世紀における戦争と記憶：スペイン内戦をめぐって」による研究成果の一部である。